

研究分野のキーワード：作曲，編曲，指揮，楽曲分析，劇音楽

研究紹介

作曲と指揮の2つを研究領域とする中で、とりわけ合唱曲の作編曲や合唱指揮に関する研究を主としていましたが、近年は劇音楽を手がけることが多く、演劇やミュージカルにおいて舞台空間に応じた場面効果を高めるための劇音楽の付し方に関する研究に取り組んでいます。これまで斉唱が多かった音楽劇の中であってあえて合唱を施すという試行を重ねることで役者たちの歌唱力の向上に役立てるなど、合唱編曲で培った技術も劇音楽の分野で応用しています。今後も総合芸術の一翼を担う音楽という要素の充実度をどこまで高めることができるのが作曲における研究課題となるでしょう。

指揮に関しては動作の基本をふまえた上で「見やすくわかりやすい指揮」を目指しており、言葉やフレーズを意識した呼吸から実際の動作への連動に関する研究は今後またゆまず進めていくこととなりますが、技術だけでなく、演奏者を思いやる心もまた重視すべき点です。

作曲作業は概ね「思いつく」「計画をたてる」「具体化する」「推敲する」の4段階に大別することができますが、作曲の実践においては和声学や対位法、管弦楽法など諸々の技法に関する知識の習得が必要とされます。初段階として、感覚に任せた自由な発想による作曲をまず試みてみることは大事なことです。のちに、かたちとなった自作の楽曲がいかにも理論に裏打ちされたものであり、いかに技法と呼びうるものを無意識に活用しているかを分析できるようになりたいものです。これらを経ることで、表現意図を技術へと応用する「意識された表現」を目指した作曲が可能になるでしょう。

また、作曲にはあらゆる事情に臨機応変に対応できる柔軟な姿勢も要求されます。作曲するにあたり、ときとして演奏者の人数や年齢層、個々の技量、使える楽器の種類、演奏時間等に限りがあるといった場面に遭遇することがあります。あらゆる制約のなかで作曲しなければならないという機会は、その実、終始自らが思うように作ることに比べてはるかに多いということには注意を払っておかなければなりません。与えられた条件下で最大限の努力を惜しまない姿勢というものはどの分野においても大事なことといえるでしょう。作曲は感覚と理論を併用しながら創作のおもしろさを追求する手段の一つと捉えていただけたらと思います。

音楽は日常のあらゆる場面において姿を現します。生活の傍らに音楽があるだけで心を豊かにしてくれることもありますし、「好きな音楽は」となると個人の趣向によってそれこそさまざまです。自らの趣向に沿う曲や新たな感動を引き起こしてくれる曲、もしくは直感で好感をもった曲などに出会ったとき、人はそれらを「いい曲だ」と思うようで、このように、いいものに触れて「いい」と思う素直な感情は生涯大事にしたいものです。そのうえで、「いい」と思ったその曲のよさがどこにあるのかを探求することも作曲の第一歩となるのです。

作り、演奏し、聞く。私の研究は、これらを習慣づけて繰り返すことでもあります。